

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第3号／1985年（昭和60年）12月1日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL0438-62-9121〕発行人＝石井哲夫／編集人＝明峯邦夫

三輪車

東京都立しいの木養護学校訪問部 篠田国雄

波のように押し寄せては、また帰って行く陣痛に堪えながら、母になる喜びを胸に女はぼんやりと冬の景色を眺めていた昨日までの騒音が、まるで嘘のように、音も、光も、色彩も、白い白い雪に覆われている。あれから十余年、誰が運命かこの不条理、親と子が別々に暮すことを余儀なくされた、ひとつの現実。今、子どもは「のびろ学園」にいる。

私は、のびろ学園を語るのに、ご存知のように子どもの遊ぶ三輪車を例にとってみた。何処の家庭でも使われ親生まれ、子どもに喜ばれている三輪車。

「前輪が所長、石井先生。後輪がのびろ学園と訪問学級」この三つの輪が調和よく始動して、はじめて、子どもに笑顔が生れる。

三輪のひとつ、訪問学級の様子を綴ってみると、子どもたちと逢った、あの日から指折って数えてみれば、炎熱の夏が過ぎ、厳寒の冬を越し、今二度目の秋を迎えているところです。お父さん聞いてくださいますか。お母さん見てくださいますか。遅々とした歩みの中にも確かな、手ごたえが現われて来ているのです。呼んでも振り向いてくれず、部屋にも入らず、散歩にも行きたがらず、うつむいた背中を丸くして、孤絶に堪えているかのように隅にいた子が、笑ってくれるのです。動いてくれるのです。病的に青色がかったあの顔に、紅のような赤味がさして来たのです。

日本で初めて試みたといわれる「自閉症施

設」のびろ学園での訪問教育一年七ヶ月の歳月は、子どもたちに確かな変化をもたらしてくれました。

訪問教育というシステム上の枠の中だけでは、とうてい得られなかった教育の効果も、学園側の限らない子どもに捧げる愛の深さと情熱が、私たちの意図するものを、全面的に理解され支持して下さっていたことが、大きな原動力となって現われて来ているのです。

開設から四ヶ月、春も過ぎ夏を迎えた七月子どもたちと一緒に本校のプールに行く、果して着がえにに応じてくれるだろうか、水に入るだろうか、と心配の続く園外学習であったが、予想外にスムーズにプールに入り、おもいおもいのポーズで戯れている様子は、あたかも魔法の水にでもつかっているかようだった。不思議なことに、悲鳴も歓声も奇声も聴えず静かな時間だけが流れていた。1回目のプール指導であった。都合四回の経験学習を終えて、秋から冬にかけては、袖ヶ浦の町民プールを使うことになる。この頃になると子どもたちの気持ちも軽くなり、外部の人々の声かけにも応じ、一緒に泳ぐ光景も見られるようになってきた。夕映えの中で、水しぶきをあげる姿を追いながら、実践という言葉を噛みしめてみた。

今年六十年度「二年目を迎えた」目標は、子どもと一緒に「寝る」「働く」ことを最大の課題として、準備を進め、先ず、六月の校内宿泊を皮切りに、七月の移動教室、九月の

機会を得て、この九月ははじめから、十二日間の駆け足ヨーロッパ旅行に出かけることが出来た。ヨーロッパ旅行は三回目であったがいずれも駆け足なので、あまりしつかりと勉強したとは言えないが、それでも外国の空気を吸うだけでも、何かチョットしたことを考えてくるようである。

その一つとして、今回は、西ドイツのシュトゥットガルト市での体験を紹介してみたい。訪問するまでこのシュトゥットガルトなる市は、名前こそ聞きおぼえがあっても、どのような市であるかは全く知らなかった。ドイツ中部のネッカー地方の中心地で、自動車工業はじめ技術工業地域の中心でもあると言うしその技術工業の中には、メルセデスベンツや、ツアイスカメラなども含まれているという。

今まで日本人の訪問が少なかつたし、とくに文科系の人たちが来なかつたせいもあって、市は、公式の歓迎を行なってくれたのであった。私たちは、障害児教育、保育に関する視察であったので、シュトゥットガルト市のダンネッカーという社会、学校担当の助役さんとエリッヒ・ハレルという市の青少年局長はじめ関係部課長の方々が親切に説明をしてくれ、中でも

ハレル局長は、一日中我々の視察に同行してくれて、いろいろな話をして下さったのであった。

その中でまず感動したことは、助役はじめ行政担当官が、幼児保育や障害児教育に対して、はっきりとした考えをもっていることと、これが、直接現場において仕事をしているワーカーや保育者においても徹底していることであった。ここで世論の統一がよいと安易に言うわけではない。日本と同じ

ヨーロッパの障害児保育、教育を見聞して

——子育ての哲学 (1) 石井哲夫

敗戦国であった西ドイツが、戦争を境いにして、文化、思想が根底からゆさぶられて、宇余曲折を経て、辿りついた結果として興味をもったからである。私には、今その辺のドイツ戦後史を語る力はないが、少くとも子育てにかかわる考え(哲学)のあり様については、我国とは異なった西ドイツの思想形成がすすんできたことをはっきりと感じさせられたのであった。

戦後間もない頃、何かの本で、民族文化の比較を行ったものを読み、ドイツと日本の類似性を指摘したものがあつたことを覚えていた。その他、日本の学問がドイツから大きな影響を受けていることもあつて、日本の知識階層は、ドイツ的なものを沢山もっている。ただ我が国の場合は、見事に多くがアメリカナイズされてきて、多様な価値観を生み出して来ているように思われるのである。

我々は、アメリカから民主主義と、個性尊重思想を学び身につけて来た筈であるが、実際に身の回りをみると、学歴尊重、早期知育偏重傾向に溢れている。ドイツは本来、徹底したエリート意識をもって、知育偏重であつた筈であるが、今回の体験では、それが大いに違ふのである。

前述したシュトゥットガルトの行政官から現場の保育者や、障害児教育の教師たちの考えは、「子ども

もの個性を尊重し、遊びを通してその人格形成をはかることであり、技術のつめこみや、一部分の行動の改善を排さなければならぬ。」という趣旨に徹していたことであつた。

たまたま数ヶ所の現場を観たにすぎないとしても、出会った人たちが、心を揃えているということ、は、どう考えたらよいものなのであろうか。ただ、私としては、目下決意をかためている実践の総括と一致したということで、意を強くしていることをお知らせしたかったのである。

バザー報告とお礼

10月27日の第21回嬉泉バザーにおいて、以下のような売り上げをあげることができました。皆様の御協力に感謝し、報告申し上げます。ありがとうございます。

- 献品 一、〇三七、八〇四円
- 委託 一六八、四四四円
- 手芸 五九〇、三五八円
- 食堂 二五六、〇六五円
- 喫茶 二二一、六二八円
- 広報 一二五、五二〇円
- 総務等 六四四、九九七円
- 合計 三、〇四四、七一九円

ひかりの学園での職業指導、本格化

製パン、機織りなど四部門

昨年春に開設された自閉症者のための成人施設、袖ヶ浦ひかりの学園では、九月から職業指導の体制が本格的に整えられ開始された。開園以来一年半にわたって生活面での指導と共に、様々な職業指導が試みられてきたが、その中で培われてきた人間関係を基に、居住者それぞれの関心や能力を見極め、今回の本格的始動となったものである。

現在の体制は大きくは次の四部門からなりたっている。

- ① パン製造、販売
- ② 機織り
- ③ 陶芸
- ④ ひかりの牧場

このうち、「ひかりの牧場」は、現在のところ、園内の草刈り、散水、テニスコート作り、などを主な作業内容としているが、将来的には動物飼育などを構想している。

その他に、洗車、やき芋販売、農作業、木



工などがおりこまれている。機織り、陶芸などの作品は、パーなどの機会に販売されている。パンについては、販売専用車によって、袖ヶ浦町内、東京などで販売している他、袖ヶ浦町内のスーパー「主婦の店」の協力を得て、店頭での販売も行なっている。

(左の写真)

聖山高原、後に続くものとして修学旅行、校内宿泊、海の家(土肥)と盛り沢山の行事が待っている。

経験した宿泊では、どれもこれも真剣にとり組み、ベストを尽くしてくれました。六時三十分の起床から、九時の就寝まで、ほんの少しの自由時間以外は、その日その日のスケジュールが細かく刻まれていたが、泣くこともなく、パニックにもならず、どの顔もどの顔も、充実した表情の中に、喜怒哀楽の感情が滲んでおりました。上田平君の働き振りは、目を見張るものがありました。どこで覚えたのか誰が指示したわけでもなく、次々と仕事をみつけては、手を貸してくれました。細かい仕事から重い荷物運びまで、随分、彼に助けられた場面は数知れない。また、小松君はスピーチの方で活躍をし、山の家での放送係として、朝に夕に、マイクを通して連絡をす

る。最後の閉級式でのあいさつは、態度もよく名調子で、きまっておりました。その他、参加した子どもたち一人ひとり、河野真吾君をはじめとして、アイドル的存在で、本校の子どもたちとの間に強い絆を結んでくれました。

このページも終りに近づいたので、畑仕事を印して結びとします。

あの子のおでこに 汗が流れていた
どろに汚れた顔が笑っている
休めといっても 休まず 黙々と
ひたすら バケツの土を運んでいる
とうとう 二十杯も運んでしまった
どっかり すわった崇ちゃんの
肩に玉のような汗が光っている
のどを鳴らして ごくりとのんだ
紅茶の香りが ほんのりと
崇ちゃんを包んでいく

。。。第八回 のびろ祭りバザーのお知らせ。。。

昭和61年2月23日(日)袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園にて。皆様の御来園をお待ちしています。

嬉泉の新聞第二部

ひかりのタイムス

昭和60年7月28日、千葉市で行なわれた、千葉県自閉症児親の会総会で、ひかりの学園の居住者二名が招かれ「講演」をした。以下はその発言の骨子と、本人たちが語る顛末である。

〔特集〕 千葉県自閉症児 親の会に招かれて

袖ヶ浦ひかりの学園

での感想

田中 雅也

今、ひかりの学園において、一年半になろうとしているところですが、仕事として、水曜日と木曜日の午前中は郵便局へ切手を買に行っております。

それから、水曜日の午後は、陶芸の仕事が増えています。

木曜日の午後は、焼きいもを作っている、国鉄内房線の長浦駅へ販売に行っているんです。

職員に立っている事や、仕事を助ける事は、僕が大人になったんです。

金曜日は、一日中仕事で、千葉

親の会に招かれて

県袖ヶ浦町内の畑から野菜を取って、ひかりの学園のとなりのわとり小屋から、にわとりの卵を取って、世田谷区内のミニレストランへ毎週配達しています。

この仕事で感じた事は、帰りが楽しみです。世田谷区内のミニレストランからあずかるお金を、ひかりの学園に届けることです。

ひかりの学園で、僕はこんな立派な仕事をさせてもらっています。これが僕の楽しみなのです。

これからは、ひかりの学園を卒業したいのですけれど、将来は、今のミニレストランだけでなく、もっと多くの所へ配達する運送業がいいと思っています。

そのために、世田谷区内のミニ

レストランへの配達を約三年間続けてやってきました。ひかりの学園でする事は沢山仕事が出来ましたが、袖ヶ浦から都会へ出る事は、都会育ちの僕にとっては、やっぱり夢なのです。世田谷区内のミニレストランの配達はやらせてください。以上をもちましておわらせてもいます。

演説して

僕が演説をしました。これは練習をしたんですが、そのまゝに練習の原稿書きを作ったのです。悪い所を山根園長に直してもらいました。

家でも練習リハーサルしたんですが、この自閉症の会で演説をして、終わったらほっとして、気がおさまりました。

家の母から「きつと仕事の事がスカウトされるとか夢が実現する」とか話を聞きました。

ただどいつまでたっても千葉のさきの袖ヶ浦で、山岸君と一緒にするのは、よくない、おもしろくないつまらないと感じます。これが不満だ。

でも山根園長のおかげで、上手に、言えたと思います。

この自閉症の会に、石井所長、山根園長、森本園長、山崎先生、ミスター小野などの職員が参加出席した。あと、土谷英俊君の父、椎の木のおいぬい先生、高原先生と見えて、参加していました。わずか少しの事は覚えて、自閉症が増えて話して。でもこれからは失敗も無く、無事成功する事が多くなれば良いと思います。もちろん頑張ります。

ひかりの学園の生活で

感じた事

山岸 裕

- ① 一、私の希望
- ② 成人施設にいていつも思うのは、やはり仕事したい。
- ③ 異性と恋して、結婚をしたい。
- ④ 生きてて、よかったなあと、思える人生をおくりたい。
- ⑤ 一度でいいから、海外旅行がしたい。お隣の中国に行きたいな、と思っている。
- ⑥ そして、近所づきあいをし地域の人間として人なみに生きたい。
- ⑦ いろいろな考えを持った人と交流して、人間味ある人になりたい。
- ⑧ 日本国に、貢献出来る人になりたいと、私は願っている。

⑧ 人のために良い行いをしたい

と思っている。

これらの希望や、夢を、私は持っている。

二、その為には、

私は何をすべきか。

その為には、私は自分のやれる仕事を成人施設でやってみよう。

階段を一步一步上って行くように地道に、コツコツ自分に、どんな仕事に向いてるか、両親、先生達と探していく。

三、私がいつも思うこと

しかしその為には、私たちが社会にふれあっていく事も必要です。しかし、職員の人手が足りなくてそこまで余裕がない。私の希望ですが、職員を増やしてほしいな、といつも思っています。

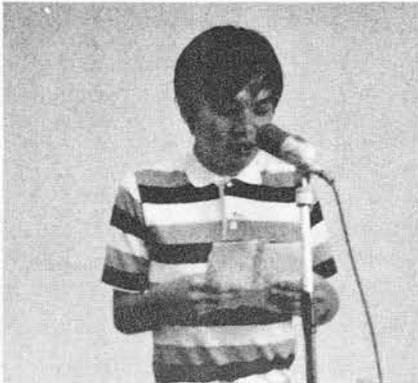
これで、私の論文発表を終わります。

四、おわりのあいさつ

皆サン、こんな私の論文を聴いていただいて、ありがとうございます。ありがとうございました。

今日は、私の人生で初めて、人前でマイクの前であがらずしゃべれました。

この演説は、本年度58さいになられた、石井先生への良きプレゼントになりました。



当事者からの発言

第一章 きっかけ

自閉症者の私と、友人のし君に人前で、自分の意見を述べたらどうかと、石井先生がすすめた。

その時、私は、これが当事者が始めて自分の事を語る歴史的瞬間になろうとは、思ってもなかった。ためらわずOKした。

第二章 練習の日々

さて、そうして構想を練って論文を書いた。

そして、師匠の石井先生に見せた。石井先生は、こう評した。

「この文章じゃ、相手にはわからない。書き直し！」



そうして、私は夏の暑さと格闘しながら、原稿を書いた。そしてその原稿を石井先生に見せた。

先生は「今日、園内で、会議がある。その時、読み上げなさい」と言った。

私は、内心急なことだし、とまどった。しかし、練習だからと、自分を納得させた。

いざ、練習とはいえ、会議に居ながら大観衆を前にして上った。声も上ずっている。TV世代でマイクを持って喋ることに慣れている私が、いざ自分がやるとなるとあがってしまう。ポーンとして、相手の顔は見れない。何が何だかわからぬまま終ってしまった。

反省点、講演の練習の時、大観衆の前で、あがらないように自分の体を調整して、心身おちついてふだんのしゃべり方で話す。

これが、今回の失敗で得た教訓だ。

その失敗の後、私は一晩は考えた。本番じゃ、失敗しないようにしよう。そのため、練習を毎日やろうと思った。

練習は、毎日三回、私の所属しているグループで集会があって、そこで、マイクを持ち、グループに所属している仲間、先生たちの前で話した。

練習の後、自分から、人々の反応を聴いたりした。そうして、人に自分の言いたいことが伝わってるか、反応を確かめた。

時には、私にとって耳の痛い注文が、聴いてる側の先生、仲間から出てきた。それに耳を貸さなくては、講演は、上達しなかった。

夏休みになった。

夏休みは、あちこち外出したり家の手伝いをしたり、本の原稿を書いたりした。その寸暇を見ては論文を読む練習をした。

時々、練習を休んだ。

夏の暑さで、体力的に私はまいったから、練習する気になれなかった。だから休養した。

休養は、一種の気分転換になっ
て、練習に新にとりくむ気にさせ
ることを、私は知った。

そのくり返しが続いた。

そして、本番の日になった。

第三章 本番

その本番の前日、七月二十七日
私とし君は、施設に登園した。
そして、明日の本番に備えた。

その日、私は早く起きた。そし
てふだんのように振舞った。そし
てふだんのように振舞った。

この時、私は、自分に暗示をか
けていた。自分は大観衆の前であ
がらずにできると……。

本番。水色のポロシャツ、水色
のスーツのズボンの正装をして、
私は演壇に行く。足はふるえてい
た。

そして、最初の時なんか、あが
って原稿を目の前において、大観
衆の顔が見れなかった。

この日、私の両親、知人、私の
いる成人施設の園長、懐しい旧知
の人もきてた。そして、人生の恩
師もきてた。

とっさの事だが、マイクの前で
喋らない事に気づいた。

とっさの応用動作で、マイクの
前で、自分は喋った。

すると、大観衆の方に視線がい
くから、スラスラ自分の言いたい

事が喋れた。それもアドリブを混
じえてやった。

そうすると、不思議なもので、
不特定多数の大観衆の反応が以心
伝心で伝わる。

例えば、こんなところは、大観
衆には、何のところがかわかん
ない。ここは、相手に自分の言わ
んとする事が伝わってる。

そうして、意を別の方に、や
ったから肩の力は抜け、あがらず
喋れた。

この瞬間、当事者が親の会で、
自分の事を親たちに向って話す、
語る——私は歴史的瞬間の演じ手
になった。

第四章 総括

私は、この体験からこう思う。

親や先生、専門家から見た、自
閉症論には、ある種の限界がある。
それを補うのは、われら当事者で
はないだろうか。

特に、軽度の自閉症者は、一番
自閉症者の微妙な心理がわかる。

そういった、当事者の側から、
自閉症の理解を訴えてく事が必要
ではないだろうか。

私は、その事をこの講演で感じ
た。

これは、私個人の夢だが、自閉
症親の会などで、当事者の側から
の、自閉症論を講演してみたい。

それが、私の使命だと思ふ。ボク
には広報の仕事が向いている。

皆サン、当事者の一言に、謙虚
に耳を傾けてみませんか……。
きっと新たな発見があるはずで
す。

この講演で、私に一つの自身が

生れた。人前であがらず、自分の
意見を喋れる。

この講演に尽力した、石井先生
ならびに千葉県自閉症児、者親の
会の方々に改めて感謝します。

嬉泉日録

6月15日 第九回ほほえみ賞授賞式

(ほほえみ賞、該当者なし 奨励賞、新潟県六花園、森
山里子ら八氏)

7月6/7日 治療教育夏期セミナー

(主催・幼児治療教育研究会。テーマ・縦断的治療教育。
友田不二男、大坪嘉憲、平井信義各氏らの講演など)

7月22/8月13日 育心会「夏期合宿」

(幼児合宿、学童合宿、療育合宿)

8月1/3日 第二回自閉症治療教育セミナー
(平井信義、成瀬悟策、小林芳文、阿部秀雄、山崎晃資
高橋彰彦、石井哲夫各氏らの講義、シンポジウム)

10月9日 のびろ、ひかりの学園合同運動会

10月27日 第二十一回嬉泉バザー

(予定)

12月下旬 育心会「冬期合宿」
一九八六年 2月1/3日 自閉症児治療教育実践講座
(袖ヶ浦にて)

2月15日 法人設立二十周年記念式典
2月23日 第八回のびろ祭りバザー